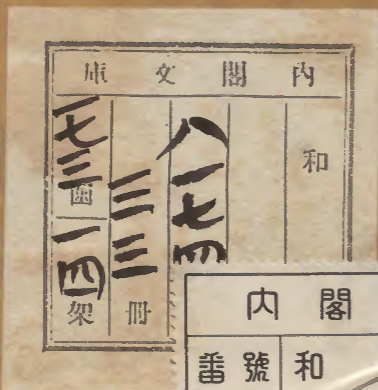
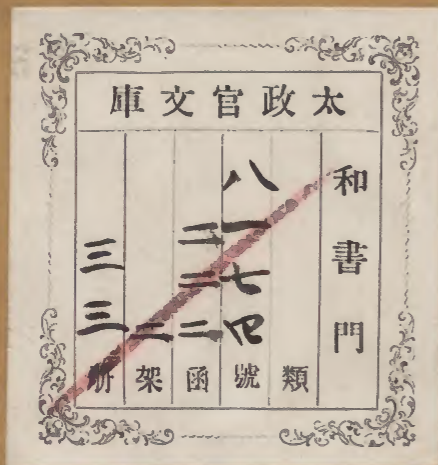
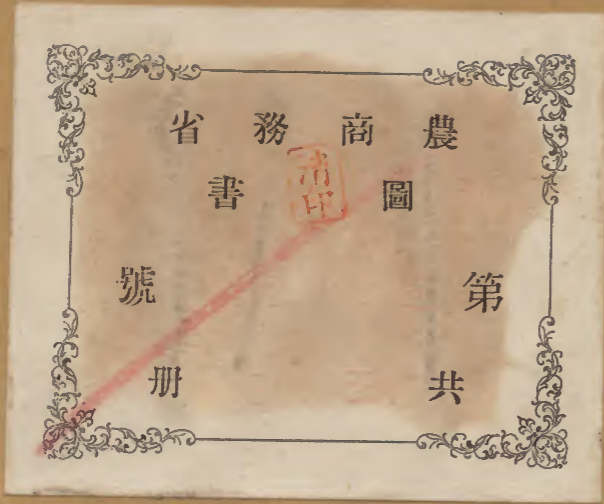


小笠原島紀事

卷之八

十



内閣文庫	
番號	和 8174
冊數	33 (10)
函號	173 180



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



小笠原島紀事卷之八

目錄

文久元年下

十一月十日

稟

同日

勘定監察兩屬吏數名隨行之下令

○同日監察屬吏隨行之下令

○同十一月外周奉行同屬吏等於江戸小笠原島事務兼

帶之下命

○同十三日小笠原嶋開拓碑文造建之申稟

○同許可指令

○同十四日八丈島漂民召具之申稟



兩公使報知書翰贈達之申

○同十六日亞英兩公使へ開拓報知書翰

○同十九日亞公使右回翰

○同日小笠原島へ本草學者召具申稟

○同許可指令

○同廿日亞書記官ヨリ立石斧次郎ヲ召具許容請求之

來翰

○同日齊藤源藏隨行下令

○同廿一日小通詞堀一郎召具之下令

○同廿二日忠徳常純軍艦奉行連署シテ携帶金申稟

○同指令

○同廿三日譯官森山多吉郎へ亞書記官ヨリ來簡並小

小笠原島在民セフジへ贈達書小笠原島地理行聞

○同日天秤並權衡度量携帶之中稟

○同廿四日捕鯨閑業申稟書

○同日忠徳注視書

○同廿六日副船千秋丸出帆期限並帆網増加之中稟

○十二月^{木日}時評試士森山多吉郎ヨリ亞書記官へ十一月

廿三日來翰回荅

○同二月去月十九日亞公使ヨリ來翰回荅

○同日千秋丸乗組軍艦方数名へ下令

○同月用意金携帶申稟不許可

○同日委任状授與

○十二月三日忠徳常純以下乗船品川海ヲ發帆

○航海船及困難等之概畧

○同十九日父島着船上陸願未

○同日外国方監察方属夫島民面語

假官廳補營

○忠徳始一坐セリホレホリワン對話

○同廿二日洲崎村ウエブ其外島民教名對話

○同廿七日奥村セリホレへ面會閑拓之大意對話

○同廿八日於大村セリホレンヨリジへ右同所之旨對

話

○十二月十五日於江戸小笠原嶋豫備船再議申稟

○同指令

○同十九日鯨漁船へ小笠原島航入用諸品積入申稟許

可

○同廿日諸品宰料架組申稟

○同日外国奉行支配於江戸小笠原島事務兼務之下令

○同日再應用意金携帶申稟

○同許可指令

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '小笠原島紀' and various columns of vertical text.

小笠原島紀 卷之八

小笠原島ハ方今外国人未住ノ地トナリ加之英国政府ニ
テ同島ヲ領屬ト為スノ内議アリト聞ユ其形勢事情如何
トモ計難ク其等ノ處分ハ勿論総テ忠徳カ注視ノ件ニ且
癸向ノ際ニ臨ミ各国在留公使等へ今般開拓トシテ官吏
渡航ノ報知アラシキ事ヲ建言センカドモ閣老其言ヲ容レ
ズ外国奉行ノ談判然ルベシト指揮ス尚同十一月十日忠
徳常純連署シ大和守久世廣周一申稟再議ヲ請フ

小笠原島而開拓ニ善ニ付亞英公使可憐
並ニ各書同ノ各府相付味書付

Vertical text on the left side of the page, including the title '小笠原島紀' and various columns of vertical text.

勢ヲ下命ス
同十三日小笠原島ニ碑文造立ノ事ヲ伺フノ書ヲ信行ニ
追達ス同十五日指令アリ
入目付村
山笠系島ハ近來碑文ニ
中上某某

水野海澄
附部 一

今般取カ水笠系島ハ元初有以用波重カ付
同島事ハ西國人トシテ移住シカ日守ト為時外
國人却而移住ハ島島トテ守符我所屬ニ差別奈揮
ト分リ直其居大往古水笠系島部ニ補初ト見出ト

節
権取様上意ニ取カトシテ是島ニ取水標述至其後
宝島巡視トシカトシテ
右神社瓦森至其先蹤ト有ニ符方ト有カ水笠系島
人島外ト有方ト有稱呼聲田仕其事即ト有方ト有視
ト日國島外ト有是島中望ト有方ト有後島ト有方ト有
之儀論ト有ト有新斗釣ト有波地到者ト有今般取石
標立立古昔ト有始末認取林文章ト有揚付ト有探仕
右時ト有白端後來ト有確據ト有取取心ト有可然ト有
右ト有然波思ト有取ト有碑文ト有取ト有不調道ト有
右時ト有取取心ト有取取心ト有取取心ト有取取心

丙十一月

覽

同日通之... 碑文... 石... 碑... 其... 事

同十四日八丈島ノ漂流民ヲ用便ノ為小笠原島ニ召連シ

ノ請

咸臨在場... 漂流民... 申上... 書付

日... 申上... 書付

水野... 後... 書

指部... 附... 一

先... 出... 崎... 日... 泊... 地... 一... 漂流... 民... 在... 場... 也... 小... 笠... 原... 島... 之... 内... 同... 島... 年... 寄... 住... 以... 所... 在... 水... 上... 六... 人... 之... 生... 存... 極... 成... 臨... 危... 且... 証... 子... 其... 頃... 帆... 住... 在... 於... 其... 江... 川... 之... 所... 在... 之... 門... 也... 代... 之... 者... 上... 申... 上... 書... 付

二... 付... 勘... 辨... 江... 味... 裏... 古... 作... 所... 之... 以... 交... 島... 一... 人... 氏... 引... 轉... 而... 西... 京... 藩... 同... 島... 人... 氣... 習... 俗... 等... 由... 心... 得... 終... 在... 河... 南... 日... 同... 年... 之... 也... 其... 成... 因... 水... 上... 六... 人... 之... 生... 存... 之... 功... 其... 外... 存... 在... 極... 成... 臨... 危... 且... 証... 子... 其... 頃... 帆... 住... 在... 於... 其... 江... 川... 之... 所... 在... 之... 門... 也... 代... 之... 者... 上... 申... 上... 書... 付... 標... 江... 度... 守... 存... 株... 同... 右... 之... 趣... 且... 勘... 定... 奉... 行... 一... 様... 作... 務... 上... 様... 下... 様... 以... 上...

酉十一月

同十六日再應建白其請... 任... 七... 閣... 老... 連... 署... 書... 翰... 英... 亞... 西... 公... 使... 贈... 其... 書... 左... 如... 之...

頼利太尼亞特派公使全權

三ニストル正キセルレニシ

ルセルホルトアールコワク江

以書翰申下味我南海廣島中
心呈系崎濱航可壘中
遊要今福那國奉行水野能
活也同有指部防一書事在
一進之可拓之卷之及八ん
と然ル子信係之預計在
乃大進是生國人務任之者
の者之由修園如とひ書乃
存書申下並其有果博言

久世之和身花押

安孫對馬守花押

重米利加名衆國全權ニニストル

エキセルレニシ

トウニセントハルリス、口

右同文

同十九日亞米利加公使ヨリ去ル十六日所贈ノ閣老連署
ノ書翰ニ回答ス

第百二十六号

千八百六十一年第十二月十九日江戸合衆國使臣

館ニ

名國事務宰相

久世之和身

安孫對馬守

名台卜、呈以

東權分十一月十六日第十二月十七日附上台下書

籍上原手上一ことと若く其書と心く台卜心呈事崎

即ち吾人此の海を領する為之回島一人員と名乗し
 雖先ん其上のことと點出しありし所也
 然此事上の如く在るに余の政府に台下は書翰に字と
 送致せしるゝて其旨を上海の利
 然此を以余亦利便國に高民此島中より得る所の
 諸乞訴は海防上之事と意知有ん事と信し小電と懇
 願を乞ね給ふ

十八日六十一日廿三日廿四日廿五日廿六日廿七日廿八日廿九日
 トウセントハルリス干記

同十九日小笠原島へ本草學者渡航ノ事ヲ信行へ就テ伺
 書ヲ進達ス同廿二日指令アリ

伊豆國竹崎に里坊へ長崎里に竹本草學
 志博理との百達は俄年同其書付

水野龍治

和洋泊者家来

栗田万理郎

右の年未本草學厚心得る漢黨學共出衆人物宜格下
 此厚取在何巨國竹崎に里坊へ長崎里に竹本草學
 志博理との百達は俄年同其書付
 生産に兼て其書取調り格厚取調り用兼りて取付存理下書
 勿論以所取古何巨國竹崎に里坊へ長崎里に竹本草學
 志博理との百達は俄年同其書付
 此の如く同様以上

西十一月

覺

杉年泊春身家来

栗田方以即

古庄庭法作甘何至國治時一非小笠原島崎人其以用外
國を以水野海流等因自船船泊一不誠能前う被重
在相百至治可被心海無事

古三通杉年泊春身家来一不遠無官以是是下被治時

事

同廿日先是小笠原島渡航通辨ノ為方今並國公使館通弁
立石谷次郎ヲ召具セン一ヲ請求セシニ本日同館書記官
ホルトメニヨリ左ノ書翰ヲ外国奉行ニ贈リ来タス

千八百六十一年芽十二月二十日江戸台衆國公使

館子に

外國奉行諸君に

萬世永利加ニニストルハ命と申一て是下小右件と
致言にニニスルハ是下カ人島行ニ付立石谷次
郎と申公使館より去り一此ノ請求と懸考一あり然
る小右次郎ハ此公使館ハ船船を往來品要領ハ一
年ハ尚要領を其故ニニス下此治ハ互らと以て
至事と理解一得て良邊をあり是子由て迷誤と防
難事と避け且つ双方之勞煩と有る一ニニス下ル
ハ谷次郎ノ譯目とありて此公使館ハ事り一以是
ハ其末々曾て愉快なり一ニ此公使館ハ又此邊ハ在

分二電口以必要と云致と覺一あり
三二ステルを其力の好ふたけ是下の用便と云
分登き旅事と云云と云希ふは確は此是下の法水
心を應一難きを認むり
○此より里下の無人島へ行きて事と傳一易うト一
此より存心去着ト是下之と云い給て二三ステル生
地心居居をり至米利知人の事討み書翰と賜分給一
中のみを云々云々云々の波方の預難事を認て之に防く
金一飛揚致白

同日西九火ノ番齋藤源藏忠徳常純ニ随從し小笠原島渡
航ヲ下令ス

同日西九火ノ番齋藤源藏忠徳常純ニ随從し小笠原島渡
航ヲ下令ス

同日西九火ノ番齋藤源藏忠徳常純ニ随從し小笠原島渡
航ヲ下令ス

何国附至外ハ存陽用ハ加ハル
用是信石方ハ後再應ト上書付

水野海防守

掛育心見不離合之海... 風浪烈多難保之海... 着可成也難申其節... 有之官家之孫... 以下法年... 以多一... 無之... 原之... 渡航... 程之...

者共氣... 同數武... 日派... 宜之... 右年... 意之... 見... 上... 乙十一月

再應... 勤且...

枚原松三之助様
軍務に非常用意之儀を申立し通
し、是頃松三様は海法三万枚に
掛筋巨細を調御の上、申付候様
に候事

同世三日ホルトノニヨリ譯官森山多吉郎ハノ書翰ニ小
笠原島在留亞國人子サ子ルセ一ボレ書翰託交子デニ一
ハ未封ノ書翰及同島測量新聞紙ヲ附レ贈リ来レ是立石
谷次郎ヲ請求ニ任セサルヲ以テ巡視ノ官吏紹介ノ為ニ
所贈ナリ

千八百六十一年第十二月二十四日江戸合衆国使
臣館
森山多吉郎様

第百下ニ開封之儀一ニ書翰と云ウヨルク望
候ニ新聞紙と是ノ書と共ニ贈ル是是島ノ住居
一ニ此ノナタニ一ニ此ノナタニ一ニ贈ル者なり
此所ニ於テ書翰ニ人ノ上ニ第下ノ信切
ノ媒ノ用ニ海法ニ一ニ此ノ書翰ニ新聞紙と共
人ノ信ニ事ニ善ク思フ事ト云ヒ集共ニ是下ニ
行ト一ニ此ノ書翰ニ海法ニ一ニ此ノ書翰ニ新聞紙と共
ノ書翰ニ事ニ善ク思フ事ト云ヒ集共ニ是下ニ
第百下ニ開封之儀一ニ書翰と云ウヨルク望
候ニ新聞紙と是ノ書と共ニ贈ル是是島ノ住居
一ニ此ノナタニ一ニ此ノナタニ一ニ贈ル者なり
此所ニ於テ書翰ニ人ノ上ニ第下ノ信切
ノ媒ノ用ニ海法ニ一ニ此ノ書翰ニ新聞紙と共
人ノ信ニ事ニ善ク思フ事ト云ヒ集共ニ是下ニ
行ト一ニ此ノ書翰ニ海法ニ一ニ此ノ書翰ニ新聞紙と共
ノ書翰ニ事ニ善ク思フ事ト云ヒ集共ニ是下ニ

アヒセホルトナン年記

子ハ百六十二年五月廿一日

神田町西戸三行の官衆國傳官館に於て

君

子ハ百五十二年五月三日水師提督セルリ軍艦以航一
幸人島ハい多し其とき其書証官ハとありしに也と
記し以て以てん是下ハ一山藤子といふ所ありと口
トト港船匠の長ハいし以て推恩し口印の蓋氣官
取と以て口印の鑄紳者ハ官位言責ハ一人とあり
も好長なる水師船匠の長ハいし以て推恩し口印の蓋氣官
其厚意とて道以て地ハ相ありし得し新開第二集と記
下ハ贈寄也

是下ハ一集ハ書寫せんは款一着くハ集と思ふ事
何りも古予とてもまし是下ハ名とを記する所ハ
多し集と記す下ハ名とを記する所ハ

是下ハ名とを記する所ハ

アヒセホルトナン

於無人ロイト港

子デニールセウリ君

グレートレウセウ島ニアル
ウーニラニゲ港一名ナルヒレ港

ウーシニング港ハレウセウ島隅ノ北西ニ在リテナハ
ヨリ大概三十五里隔リアリ
著シキ堺界ヲナスレウガルロルフ島ハ其港口ヨリ大
概十二里西北ニアリ此島ハ東方ヘケル形状ニ其
高十百フット聳ヒアルナリ此高處ヲ除ク外ハ低クシ
ラ平地ナリ
シウガルロルフ島ノ北部ヲ過キテ其東南ニ於ル東道
ハ港口ニ通シ且ツケル島ノ北及ヒ西ニ通スト覺ユ
ルナリ○碇ハ二十或ハ二十五ハドムノ深カニ及ブ
ナリ故ニ其葉筋ニ傍フテ船ヲ碇泊ヲ得ヘシ然レモ
キ案内者有ニ非カレハ幅廣キ船ハ其葉筋ノ間ニ船路
ヲ取ルテ甚タ難シ其故ハ碇網ノ長間ノ場所常ニ淺キ

所モ葉筋モ潮水満チアリテ覆ヒアレハナリ
此葉筋ノ側ニ兩頭アル若石多ク簇生モテ(地圖ニ就テ
見ルヘシ)東ヨリ三十七度南方ニ在リ
○此葉筋ヲ航スルニハ東ヨリ一又四南方ノ燈明臺岩ニ
傍フテ葉筋ヲ取ルヘシ燈明臺岩ヨリハ東方ヨリ四十
九度南ニ傍フテゴシテ岬隅ニ至ルヘシ此ゴシテ岬隅
ヨリウーシニング港内ニ乗リ入り碇ヲ下スヘシ
○汝ノ船コシテ岬ノ北ニ於テ帆ヲ上ケント欲スルハ
ハ動搖ニ堪ヘサルヘシ而シテ汝等茲ニ圍船場ニ於テ
ル如ク安静ヲ欲スナルヘシ且ツ陸地ニテ圍屏シアリ
テ碇泊ニ宜ク常ニ大風ヲ避ケル場ヲ欲スナルヘシ
清水ハウーシニングノ街中ニ湧出モアリ

船將ムセールリノ命令ニ因テ合衆國軍艦副將シ
ラスベント之ヲ測量ス
カ
カラトカ名船及ロスコスケルハシト名船ノ測量家マデ
カシ人及ヒ「ベン」子ツト名人西人ニ因テ為セル無人島ノ一
ナルペール島ノ西方ニ在ルロエトト港口ハ誤ル可カ
ラサル如宜シク定リアル船ヲ乗り入ラント欲スルニ
其船若シベトセイ港ニ在ルルハ「ス」クハ「ス」西隅ヨ
リ南方ニ向テ其海濱ヲ廻リ乗り入ルヘシ此海濱ハ
高キ所ヨリハ容易ク見ユ然レモ其所敢テ高岸ヲ為ス
ニ非ラス○其濱ハスクワニ礁ヨリ南方ヘ碇泊ニ箇長
ノ廣カアリ而シテ築碇ニアリ

海濱ノ中部ハ濕地ニシテ低ク殆ニト海面ニ等シ○其
潮ハ大概ニフトトノ高ク至ル而シテ北所ニ珊瑚ノ
岩アリ是レハフトトノ満潮ニ至ル南隅ノ北方ヨリ北
ニ碇網一箇ノ際ニアリ
○然レモ乗り入ル、船ハ実ニ南隅ニ近ツキ其礁上ニ
至ラサルヲ欲ス○周繞シテ此島ハ殊ニ鯨獵船其
生産物ノ為ニ船ヲ寄テ其缺乏品ヲ求ムルナリ○土産
ノ果物蒸餅母ヲ製スル根及ヒ其他植物諸種ノ果類并
ニ野猪野牛ノ類ハ此所ニ三十五年以來移居セルサシ
トイツ島人及ヒ白人ヨリ求メ得ヘシ○樹木ハ羨ニシ
テ繁茂セリ水モ多ク有リト虽モ其珊瑚岩辺ヨリ湧出
スル水ハ悪ク損敗シアリ

碇泊所ハ南西ニ開キアリテ甚ク善ナリ○船將ノ命令
ニ因テ為セ此瘦素ハ曾テ船長ベトシテ著ス地圖ニ本
ツケナリ
ニユススケリハニナ船ノ測量家ベン子ワト氏説テ曰
クベトシト氏改正ノ地圖ニ因リテクレト口ウカウ
島ノ十八港ノ位置ヲ考フルニ我時計ニ因リテ口エイ
ト港ニ於テ試験スルニハトムホレ河ノ方ハ五里距離
西方ニ位置シアリト故ニ全島ハ其信正ノ位置ハ迷フ
ル如クニ位置シアリト船將ムセベルリノ命令ニ因リ
テ合衆國軍艦副將シラスベント氏千八百五十五年第
十月一日媽港ニ於テ之上梓ス

今般渡航ニ付天秤並秤交ヒ升等ヲ携帶セニ事ヲ乞フ
同廿四日勘定奉行出雲守松平康正カ所呈ノ鯨漢書ヲ志
徳ニ遊興シ其評議ヲナサシム同廿六日注視ノ旨趣ヲ庭
言ス

鯨漢書方ニ依リ相見書付

松平只雲身

望見遠左門内代正行紙尾國
藩多部村松原下此
平野由之代子
同ノ身

平野康翁

古之者遠海鯨漢書業ニ識新且知ニ付同ノ之致ニ通
申後其書ニ極小且京崎新記且石室ニ所出通ニ後ニ
信是無誤ニ故同下ニ鯨漢書ノ外國人ノ同島造ニ

以舟以用荷物上小運送方由者... 用禱... 可
... 水野... 寄
百十一月

同廿六日忠徳等小笠原島渡航、千秋九江戶出帆日限关
二帆網具等ノ儀ニ付建言ス

千秋九日江戶島渡航ノ儀ニ付建言ス

水野... 寄
井上信濃守
本村... 守
一

咸臨丸出帆ノ事... 同... 寄
... 水野... 寄
... 井上信濃守
... 本村... 守
... 一

兩十一月

同十二月朔日去月廿三日ホルトマンヨリ森山多吉郎へ
贈り来リシ書翰ノ回答ヲ志徳ヨリ贈ル

亞国書記官

ホルトマン

光緒二十二年十二月廿四日附之函山多吉郎一被贈書翰
既回人々巨細中書委曲領知せり書中秘托所寄之島口
トト港在子ヲニルセウリ口ノ書翰ニニ送可申
且港入口証書ヲ書付一通是亦所子ナリ格別心下ニ返
函ク感一ノ様書答ニ此中謹言

同十二月 水野龍溪

同月二日去月十九日亞國公使ヨリ贈り来ル書ニ再ニ左

ノ書ヲ答フ

未幾ニ昔ノ下命ニ同日用事金亞米利加合衆国ニ三六トル

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

同月二十日不山吉書一不送不キヨルレニニト十時

定心... 是去... 心... 併... 十... 其
有具... 言... 世... 知... 花... 押

同日軍艦方鈴木勇次郎荒井郁之助力石太郎甲賀源吾軍
艦練所替古人杉島廉之助軍艦取調役組頭柴田準太郎

同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ
同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ

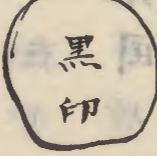
同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ

同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ

水野筑後守

伊豆国附島之備向取調且小笠原為開拓差遣度ニ付而
者諸事應時軍可及差因服部帰一差遣間可相談者也

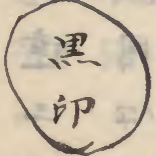
文久元年辛酉十二月



服部 帰一

伊豆国附島之備向取調且小笠原島為開拓水野筑後守
一同差遣ニ付而者諸事及相談入念可取計者也

文久元年辛酉十二月



同日委任状ヲ與フ其文左ノ如シ

同三日忠徳ヲ始其屬吏調役由比太左衛門同並田辺太一
書物方富田達三須藤誠一郎定役元締助小花作之助定役
益田鷹之助同心松浪権之丞等隨從ス監察方ハ常純首領
シ其屬吏役目自佐藤真三郎松本三之丞小人目自林和一
郎等相從シ其他勘定深山宇平太普請役上村井善平差副
テ山川ノ測量及資財ノ出頭ヲ掌リ鉄炮方江川太郎左工
門ガ手附中濱万次郎之万次郎力傳善ハ先年漂流シテ小笠
原島ノ内ニ在リシヲ並米利加ニ扶ケラレ彼国ニ留ル事
多年善ク外国ノ事情ニ慣レ將通弁ニ長シ横文ヲモ知ル
ニ因リ忠徳請フテ此行ニ加ヘ又長崎在住ノ荷蘭訳士堀
一郎モ蘭語ノ余暇ニ英語ヲ兼タリトテ通弁ノ為之ヲ召
具ニ多勞隔遠ノ羈旅医ハ救急ノ必要且治療投劑而已ナ

ラス幕府ノ医師小野荃庵ハ本草學ニ長シ物産ニ精密大
垣ノ藩医宮本元道ハ画事ニ長シ山水ノ勝景動物草木ノ
写真ニ精妙ナレバ各其所長ヲ兼務トシ二名俱ニ隨從一
行攀テ江府ヲ登シ軍艦繰練所ニ至リ同所ヨリ一同咸臨
艦ニ乗船ス艦中ノ役員小野友五郎總轄シテ大小ノ事務
ヲ統ニ指揮ヲ加フ塚本桓輔松岡盤吉豊田港西川信太郎
等針路ヲ按シ柴弘吉淺羽甲次郎鈴木録之助其運用ヲ知
リ杉浦金次郎喰代和三郎高橋栄司等汽機ヲ運ニ近藤熊
吉銃礮ヲ管シ矢野沢次郎吉一艦ノ用費ヲ轄シ以下水夫
數十名僉航海ニ使役ス其餘全權始諸吏ノ從僕若干人艦
内頗ル雜選スレモ法令嚴ナレバ些ホトカサワシヤ蠶塵事ナク静穩ニ
テ呂川海ニ碇泊ス翌四日曉天蒸氣ノ炭烟空ニ立チ度出

船ノ機會ニ至タリ起錨シテ艦ヲ南方ニ向テ發駛ス此日
海上波靜ニシテ船行恙ナク同日ノ夕尅相模国浦賀ノ港
ニ着船投錨シテ今夜ハ此港ニ繫泊シ五日六日ノ兩日滯
船專航海中ノ準備ヲ整フ柳浦賀ノ港ハ江戸海湾ノ咽喉
出入ノ廻船輻湊ノ地ナルニ因リ食料ノ雜岳多クハ此港
ニテ積入レ用水ヲ汲蓄ヘ準備全ク整セシカバ同七日ノ
朝午前九時同港開船同日黄昏伊豆ノ大島ヲ左ニ請ケ針
路ヲ南方ニ指シ蒸氣ヲ盛ニ焚テ駛行シニ夜ニ入り逆風
遽ニ起リ漸々風威激烈蒸氣ノカニ船ヲ進ヲ行ク事ヲ得
ス加^{カサシメ}潮勢迅烈船長以下水夫ニ至ルニテ機関ニカヲ尽
スト^カ風濤ノ^波避ルノ術ナク船ハ東ノ方ニ吹流カ
レ翌八日モ風尚止ズ又其夜逆浪ニ漂ヒ同九日ニ至リ船

ノアル所ヲ測量スルニハ大島ノ沖東南ノ方廿三里程ヲ
隔タル大洋也初議船ヲ八丈島ニ寄セ移民ノ主趣ヲ説諭
シ有志ノ男女ヲ引連レ小笠原島ニ航ルニシト豫メ決定
セシカドモ在斯暴風激波ニ臨ニ強テ八丈ニ寄ニトス
モ逆風且潮先激烈輒ク船ヲ棄リ着クベキナラネハ風順
ヲ得ルノ日ヲ俟ノ他ナシト軍艦方ノ詢答アリ因テ忠徳
常純ヲ始一問其可否ヲ評論ス蒸氣ノ力風浪ヲ破リ難ル
上ハ見据モ無キ順風ヲ俟烈風激浪ノ内ニ漂ヒ教日ヲ將
ルハ最モ危キ事ニシテ初突八丈又船ヲ寄セント議リシ
ハ海上平穩ノ日ノ定也今在斯困難ノ急ニ臨ニ琴柱ニ膠
ル備固ノ論ニ機會ヲ失ヒ若シ此上ノ危殆ニ至ラハ悔
テ詮ナキナラヌヤ然ル危キニ居ンヨリ一先小笠原島

ニ着船シ又為方ノ無カラズヤハト議急ニ決ニ軍艦方共
商議ノ上猶南方へ針路ヲ指シ駛行シニ又夕一層ノ颶吹
起リ逆浪艦上ヲ打越船艦覆没セントス一艦中若船ナル
者モ無ク顛仆嘔吐各患苦ヲ極ム傳聞南海ハ晚春清明以
後地氣南ヨリ起リ北方ニ至ル然ルヲ以テ麥秋羣月林鐘
孟秋燕去ノ五月ハ南風ヲ常トス晚秋霜降ノ後ニ至リ地
氣漸ク寒シ北ヨリ起リテ南方ニ至ル故ニ孟冬黃鐘季冬
孟春如月ノ五月ハ北風ヲ常トス是平穩ノ時ノ頃候也若
其例ニ及スルニ至ラハ風暴烈ナラカルコトナシ抑大風
ノ烈勢ナロク颶ト云俗呼テハヤラト唱フ書紀神代ノ卷
ニ疾風迅風奔波旧事紀ニ連飄共ニハヤラト訓ス和名類
聚鈔ニハ暴風ヲハヤラトモ亦ノワキノカセトモ訓ヒ今

ハヤテト云フハチヲテニ訛リシナルハ小補韻會ニ颶
嶺南録異云嶺嶠夏秋雄風曰颶風千里拔荒雜録云南方颶
風以其四面風共至蘇文忠颶風賦颶風者具四方之風ナト
アリテ毛利負齊ク大廣益會玉篇ニハ訓ヲウニカセト副
ハ衛過切海中大風ト見エタレハ其風ノ烈シキヲ云フ名
ナルハ論ナシ颶ニ勝リテ尚甚シク激ニルヲ颶ト云俗ニ
アカシマト稱フ玉篇ニハ訓ナシタリト假字ヲ加ハ職
刺切風吹風動也トアリテ共ニ海上ノ暴風也然ルニ颶ハ
常ニ遠ニ起リ颶ハ漸アリテ起レリ尤颶ハ瞬間ニ發リ立
地ニ止ニ颶ハ吹起ルヨリ一昼夜或ハ二三夜白乃至數十
日モ止マザル事アリ春夏颶多ク晚夏ヨリ秋ニ至リ颶多
クハ航海ノ諸船此変ヲ懼レ專注意ニテ雲ノ為躰ヲ考

一 聖若半天ニ起レハ帆ヲ下ケ舵ヲ深ク差卸シ船脚ヲ強
クシテ不虞ノ豫備ヲ為スハ船人ノ常ニ覺悟スル可也然
ル用意モナク颶ニ過リハ脱ルニ幸ナキニアラネト若シ
舵ニ過リニ至テハ風勢激烈脱ルニ術ナク多ク此為ニ
傾覆ス然ラヌガニ風暴ク濤立高キハ冬海ノ常例ナリニ
在斯洋中第一ノ難風ニ遇ヒ救日ノ漂蕩精氣衰一最心細
キ央尚一天結陰黒雲船ヲ覆フカト覺ユ暴風一入條ヲ衝
凌兢キ事言語ニ盡スベカラズ十一十二十三ノ三夜白ハ
颶風激汝ヲ起シ暴雨益ヲ傾ク此為驚濤空ニ起テハ船半
天ニ上ルカト疑ハレ濤底ニ連レテ船ニ沈没スハカト覺
ユ吐嗟一艦ノ甲乙鯨鯢ノ脰ニ屠ラルベシト驚愕事幾回
ナリヲ知ラス斯テハ生モ得難カラント船將始軍艦ノ士

官遠逸足ヲ踏止メ水夫ヲ指揮シテ機械ヲ操リ力ヲ尽シ
テ甲板上ヲ打越ス逆波ヲ凌キ漏入ル途ヲ汲乾サセ童波
上ニ浮ニ風ニ流カレ十四十五ノ兩日ニ至リテハ小笠原
島ヨリ遙東南ニ漂ヒ十六日尚前日ノ如シ十七日午後
ニ至テ颶止ニ雨霽レ激波稍静リ人々初テ再生ノ心地ニ
軍艦方測量ニテ乘艦今在ル処ヲ驗視スルニ二十三度十
七分ノ東南也兎角スル程ニ南風吹起リ針路ヲ直ニ船ヲ
小笠原島ニ向十八日夜自十九日着船父島ナル奥村ノ前
灣ニ入祝炮ヲ奏シ投錨各安堵ノ思ヒヲ為セリ此時地方
ヨリ一隻ノ扁舟ヲ漕キ本艦ニ向テ来ル者アリ是水先紫
内ト云テ在島ノ英國人ニ名カナカ南島人一人一名乗組テ
来リ也頃テ本艦ニ扁舟ヲ着ケ事ノ旨ヲ報ガ兼次ノ者

全權副佐ニ披露ス忠徳常^統其趣ヲ聞幸ノ便宜ヲコト得
レト先外国方ヨリハ太左エ門ヲ指シ監察方ヨリハ三之
亟^ニ指尚善卒ヲモ呼三士ヲシテ江戸發遣ノ以前ホルト
ノシカ所托ノ書翰ヲ齎シ之ヲ迎候ニ尋テ今般ノ巡視ノ
旨趣崖畧ヲ説ホスヘシト命シ万次郎ヲ通弁トシテ隨從
ナサシメ水先ノ左島人ヲ嚮導ト為シセイボレガ家ニ至
テシム是曰人ハ酋首ノ如ク在島人ノ処分ヲ管ルヲ以テ
疾ク彼ヲ説クヲ肝要トスレバ也三士セイボレカ居宅ニ
至リホルトトシガ書翰ヲ達シ今般台命ヲ奉シ巡視開拓
ノ旨趣ヲ懇々ト説ホス且彼カ未島ノ事實ヲ尋問スセイ
ホレ先説ホリ謹兼シ次ニ其身ハ千七百九十四年第七月
世一日亞米利加合衆國ブラツキフキタ^{地名}ニ於テ出生今

年己ニ六十七歳今ヲ距ル事世ニ年前千八百世年第五
月五日三乙島ニテ轉移ノ準備ヲ調へ便船ニ乘リ同年七
月十六日父島ニ到着洲寄村ニト居後奥村ニ轉住在留ス
其始國命ヲ兼轉移セシニハ非ス商買ヲ以テ家業トスル
ニ不利ノ事アリテ居テ他國ニハ移セシ也現今父島在留
ノ人勇三十六名家数十九軒其ヲ英國人ジョトシホトツ
ントトマスエリチウエブトエール者等ト大小ノ事件ヲ
云ハズ百端相共ニ商議シ島中ノ処分ヲ沙汰シ来ルト虽
氏固ヨリ首領ナケレバ定マレル法令モ無ク在住スルモ
ノハ根原島合之馭スルノ權無ク慶置ニ苦衷スルコト抄
カラスト既^{ミカク}往ノ郷談伏薪吞炭ノ事情ニ至ルニテ懇ニ説
ホスヲ三士一切聞畢テ其意ヲ得別ヲ告テ本艦ニ歸リ應

接ノ顛末島中今日撃スル分野ヲ詳悉ニ復命ス忠徳帝純
此復命ニ大約異論ナカルベキヲ察シ然ラハ明日上陸シ
全島統馭ノ端緒ヲ奏クベシト商議于此決シ三士及通訳
ヲ慰勞シテ各寢房ニ入り過刻迄ノ困苦ヲ忘レ轍魚江ニ
放カレ枯苗雨ニ遭フノ心地ニテ今宵ハ寢ヲ安クスル事
ヲ得タリ翌レバ月二十日黎明ヨリ上陸ノ準備ヲ為シ志
徳帝純ヲ始而寮ノ属吏及勘定方以下隨行ノ諸吏通并等
一月上陸備島山ノ為躰ヲ眺ルニ峻峻タル天嶂遠近相連
リ立チ深谷地ヲ帶リテ崖岸ノ秋ハ鑿ヲ以テ穿チタル如
ク高嶺ハ天ニ横ハリテ崗窓ノ塔宛然カシテ削ルカト疑
ハレ海面ニ群リ立テル巒ニ遠キハ眉ノ如ク近キハ盆石
ニ似タリ西ノ方ニハ一條ノ河水滾々ト流レ大村ニ接ス

東ノ方ハ堺浦ニ續キ洲崎村ニ隣ル海濱ハ白砂鷺毛ヲ布
クニ似テ非時ニ降ル雪カト徳タレ海底深キレバ風アリ
テモ彼最平ニシテ繫船ニ便利也村落ハ港ノ奥ニ茅屋疎
ニ立飯烟空ニ飄舞村林家ヲ圍ニ後ニ高山アリ是所謂旭
山ニテ秀峰天ニ接シ白雲山ノ腰ヲ帶リ画クカ如ク折シ
モ三冬ノ末ナガラ土地暖温ニシテ草木全ク枯レ不実ニ
遊仙ノ地トモ可謂勝景向フ所毎ニ音ニク珍ニカラサル
ナニ先便宜ノ所ヲ借受テ假リニ此所ヲ官廳ト定テ三野
白ク幕ヲ張り番卒ヲ置キ設全備ニテ各同所ニ出張ス子
サ子ルセイガレシヨリジヨリジホーリン等ヲ微出面晤
ス對話筆記九ノ如シ

一應挨拶畢

始夕而多分一其其方之小永年每子之夕五等一其其大

雜考

當此小立何十年程居在也

之指之年程居在也

此在指在也其指之居居有上指之其力上

以選其力居之其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上

古之竹之進之內也之其民之移其力上其力上

其力上其力上其力上其力上

夫之其力上其力上其力上其力上

後英國所領之積之其力上其力上其力上

有之古考其義知其力上其力上其力上

垂細之其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

其力上其力上其力上其力上其力上其力上

右岸一より島氏一遣之

一三ノ廻橋口

古伝後者よりセトボレウエブホトトニ三人一巻生

一提煙草入世致を

右岸一より前ノ別三人一巻生

利重ハ辨ハカノ右岸納ノ

難多頂戴仕其

在鳴島島之巻之由之台之巻セトボレ巻ト其片遣之例

立之昔強其様ウ例其

雄雅ニ書セトボレ一通与長小受也

新有子存様

心末之方在事之成有之其ウ、ウヤ立且送至医師也

右邊中官病人有之其ウ、ニ中其様

只今事為り病人も巻以様其官有之其新之巻ト

其

当地之地震之如何其様

大地震之無生様其様其ウ、宛之仰ト一今年毎己答

位有之様

津波之如何其様

历年より七々年以寄大津波有之其切之私所有之家

五軒程押流ト別一家具什志も流米皮ト様

右ノ木トトナシ後末後ノ事ト其様

其様ニ其中様

其節ト人トハ怪事ト其様

人形を無事と有る也

去る何月此の事と有る也

十二月廿九日の事と有る也

此より東南の方か首に我國母島と唱はる島との往來

記す也

層は此也

古島と人家は軒程有る也

四軒有る也

居民は何國之人種と有る也

一人は英人一人は華人と有る也

其の餘は力十カ人の有る也

何所か之往來記す也

此の山形は之往來記す也

去る之島を尋りて存す

此の如く見ると航路は四時して着島は多し風候も

寡り候と有る也

録籍す也何也

此の島より一倍も多分有る也

此の西の方の島は二島と有る也

其の事也

此の二島も之麻草多分有る也

古島へ之折る事也

其の事も多分吾等も其の事也

其の事も一用と有る也

亦杖之如何山無等

古之此島同様とて桑山之可也

此等野菜種物多分於此採得

標之如何

居於此之種物亦と欲要存置一と

此等野菜種物多分於此採得

居於此之種物亦と欲要存置一と

右之三畢

應接些モ異論ナク彼力兼肯ノ^至端ナルハ案外也ト先奈端

ノ吉祥ヲ祝ヒ片時モ早ク御國旗ヲ賜ケ皇威ヲ^{カヤカス}光輝ヲ

急務トシ建置ノ地ヲ撰フニ奥村ノ後山ハ全島第一ノ峻

嶺此極巔然ルニト決議シ本日直ニ登山ヲ企テ土人ヲ

嚮導トシテ山ノ麓ニ至リ遙ニ山上ヲ仰瞻ルニ羊腸タル

細道^嵯峯ニ續ケルハ是島民等カ樵路ナルク列立ル大

小ノ嶺ハ參差画ニ異ナラス稠密ナル深林ハ常葉落葉枝

ヲ雜ニ潤溪ノ絶壁嵯峨トシテ寒草風ニ乱レ路傍荆棘生

暢テ人ノ步行ヲ妨ク登ルニ循ヒ徑路峻岨枯草ヲ結棄テ

ルハ是何人ノ聚ガ累レハ叢ニ纏フ藤ニ纏リテ漸ク山巔

ニ至レバ禿山天ニ聳白雪眼下ニ露キ四方ノ群山僉ハ低

クニテ眺望ヲ支ユルモ無ク海灣島嶼ヲ一目ニ入人ニ

此地屈意也ト直ニ^ガ鄧偈ヲ樹テ日ノ丸ノ御旗ヲ掲ケ因

テ後ニ旭山トハ号ケ也日己ニ針照人ト遠望ニ心ヲ集

ハレ不^レ因^レ時刻ヲ迂ヒヒ一驚キ下山ヲ促シ歸路ニ臨ムハ

樹下ハ道ヲ理ム落葉ニ乘リテ溼リ濕滋ノ地ハ道滑カニ

之ヲ歩行ニ自在ナラズ勞スルヲ却テ登リニ待セリ免角
シテ難路ヲ下リ黄昏假官廳ニ歸リ着ニ島民ノ居室内地
邊阪ノ民屋ト異リラワロリ一名タコノ木ト号ルモノヲ
柱桁トナシ野芭蕉ノ葉ヲ以テ屋上ヲ葺ケリ總テ見ルモ
ノ開クニト耳目ニヤクラニキ心地ニテ土風八丈青島等
ニ太ク異リ藁客心ヲ増終夜帰夢ヲ不結ハナシ
同世ニ日各洲崎村ニ至リウエゴト對話ス
一應採擷畢テ
生方為吟ニ来リ候ニ年々其武
英國千八百四十七年亞國紅チヤリバント申縣源
少テ為吟ニ来リ病氣ニ付懇話家ニ残リ申候
為村人等何行ニテ人員ハ人從其武

家三軒ニテ旧行ハ神理ニ有リ家内ニ外ハ英人一
人トシマシシナニ申者曰病氣ニ右ニ去ル七月為
島ニ来リテ同入海ニ英國軍艦ニ水車ニ有リ其番
蘭縣源紅口ニ山ニテ紅チヤリバント申縣源ニ止
島仕候
夫ニ初至ニ外ニテ去リ上居候ニ其武
私名を記シテ千ヨリニレワレルロウイニト方チ者一
申立候ニ乞止島仕候トニシテ曰縣紅ニ兼右ニ止
止リテ候
此邊ニ畑ニ生方開墾ニテ所有ニ心ニ其武
此邊ニ英國リチヤクナリニゲトモ申者ハ畑ニ其武
用人候ニ為時ヲトテ島ニ其武仕候由ニ其武

及銅版ノ四左ノ如ク

銅版三丈一十
大版二丈十寸
一尺三寸

校文和解

貌利太尼王殿下小部
フリエーとー千人
八百二十七年
六月十四日
貌利太尼王殿下
部代小部ヨリ
千人
部代
部代

同廿三日奥村ニ於テセホレニヨリレウ子一再對話

一應様抄

中宿坊家ニ依テ流儀書中ニ所見ト通テ宛紙有テ

初買上方ニ洞ニ極厚利ト取

二辨口買上ニ取

初買相取取方ニ取

只今ニ取ニ取

争向テ用無ニ取

初買一辨ニ取

初買

新洞ニ取

新洞ニ取

何分新車と申

如何し其の龜と捕

浮し其岸淺く引括り捕りし

何處より多く集りぬ

多分川内にて其岸に一龜と捕りし其龜跡見し

其岸定む場所と云ふは西岸に此の龜は上り

卵と生と其石多分と捕りし

四重と捕りし

常りし西岸に此の龜は上り

家と云ふ一物と申す

輕し其て半條の如く塩漬に合し其水有る場所

生し其中其肉と半條の如く厚味、方と此の龜と申す

此の龜は

燈油と云ふ用ひぬ

其の煙は立し其臭も多し願て此の煙

右油餘燼取等と成其荷葉樹と云

懸空の如く其の香は遠く其の自定り申す

一ト云ふ

西洋の如く申す

此の政府より法を定むるは

其の如く其の法を定むるは其の如く其の法を定むるは

其の如く其の法を定むるは其の如く其の法を定むるは

其の如く其の法を定むるは其の如く其の法を定むるは

其の如く其の法を定むるは

連三 既分可致

唯今既至之紅珠官見方下下

島民強人解仁

二十九人之屋座

一女子三人

女子三人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

男子一人

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

此名之何と

英人トリス

へりて興一う中味

兼知は様

此時別段物ヲ与フセーボレ並配下ノ者等一椀十人前別
ニセーボレへ三人前ニヨーじ並配下ノ者一十一人前別
ニジヨーじへ三人前ウエブ並配下ノ者一七人前別ニ三
人前ウエブへフラボー並配下ノ者一五人前別ニフラボ
ーへ二人前カレニ二人前ニパレへモ同様其他蠟燭十挺
三人ノ重立ル者等一以上ハ僉政府ノ既也重立ル者一扇
子一本死別段セーボレへ扇子一本綿繪ニ枚死重立ル者
等三人へラボーカーレニヤバニ一錦繪二枚ワ、外ニ猪口
一筥死重立ル者等一以上忠徳ヨリ授与ス小刀類一本死
別ニセーボレへ一本手巾四條筭五本死重立ル者等三人

へフラボーカーレニヤバニ一ニ死首飾セーボレジヨーじ
ウエブへ各四死フラボーカーレニヤバカへ各二死並配具
以上常純ヨリ授与ス各受納ノ

種ノ種ト物類有頂戴此其

セーボレハ子供多ク由方ニ依ニ付為島ノ承任方ニ言
奉志ニ其式無ク便取考有ク其ク功固前至心死其武

既生為吟へ任居即各款望此方所ニ見也其

ジヨーじハ單身ニ依ニモ有ク其方何カ其武

獨身ニ依テ其得方同古方一長其考ト其人ニ白急極原

切ニ世強方一其其方セーボレ同様承任此等其武

ハ其妻ニ依テ其方不達其其方一其其方其其方其其方

心行ニ其其方

美人の姫君にと申す哉

ウケレムケレトと云ふ中世の人又美人の者も其時を
為時と云ふ世に

曰く父を仁と申す哉

美張りウケレムケレトと云ふ

ウエドの口様不任と云ふ哉

美より永く経るに吾等と云ふ世に

此強もと一ボレ一申流せしめく古様と云ふ世に

永く由候と一之と云ふ迄切実と云ふ地と云ふ年と云ふ作所

美許是より望望に美と云ふ地と云ふ年と云ふ作所

或は切実と云ふ場所ありて、此方段人より電図と云ふ事

然る後示り掛りて申す

兼知行様

此の遠路に其方在切実無情不し道、之分度一と云ふ

其方為意交証向事と云ふ之方為交証向事と云ふ標本と云ふ

、標本と云ふ切実と云ふ場不意と云ふと云ふ地不と云ふ也

方と云ふ交証向事、所持度一吾等此居証一と云ふ下し

層村田也一ボレ候不しと云ふ場不と云ふと云ふ人、之分切実候

哉と云ふ地人もかり切実候哉

今くせしボレ切実申候と云ふ方人、其人有し其時大に

座り切実候と云ふ事候

正ヨリ切実候と云ふ事候

形大ウリ一と云ふと云ふ人、之分不持度一候候

其地心と云ふと云ふ哉

ウリケレト又新室に如まゝ引續け人其常と總論
島上之を移して在所に任じ地所於江右ハ至し神
ウエ下之打言を山河、其武
臨時キエリム申島子治者一括理ウリヨムナ
ルヤニナリテ若知屋中陳
若知同ノ為島一法之味新和語加丁以唯今、之
直橋水形跡ノ重能句一語也
林由之海王山ノ下ノ伐是其心行ノも不方上其得在
只今也切完規畑地一植竹味句を格予其地ニ植竹也
方ニも丁用者下中立其申之伐本親ハ成其新ハ給
之ハ其也
家作ニ用理切石中交其

在源ノ修家上同森文之存伐丁下済其節と申立其圖上
互株上取中並之也
其高其味其節上中立其
山ニ所於其一語理
山ノ上其與上羊其者之右ニ揚也ニ伐リ取亦如之取極
其子其親之四味
村子其高上水之移其植竹味其心之其也
路ニ植竹味其心之揚也ニ伐リ取亦如之取極
其高其味其心之揚也ニ伐リ取亦如之取極
其高其味其心之揚也ニ伐リ取亦如之取極
山ノ柳其味其心之揚也ニ伐リ取亦如之取極
其高其味其心之揚也ニ伐リ取亦如之取極

河上政一書

山ノ島ハ平野平野ハワノ島ハ一豚平比島ハ一牛豚

平上政一書

右標ニ其ノ自家於其生音其ノ一揚子也ノ其ノ一

子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

右標ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

島ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也其ノ一子也

所望は極端に少く
シヨクシヨク
其脚上軍加へ
新令を好味
シヨクシヨク
進、内地より
其の申候
七、ボレ
本國政府
七、ボレハ

所望は極端に少く
シヨクシヨク
其脚上軍加へ
新令を好味
シヨクシヨク
進、内地より
其の申候
七、ボレ
本國政府
七、ボレハ

張計以控西人

今之三島人

通河之通

世一ホレハ日島

兼云乙島より交分

アヲホレト去河

或千八百三十二

英人

葡萄牙人

カレニハ何國

亦英人

心

千八百四十五年

前多中

業知

社

下

為

河

新

急

大

大

大

同世七日奥村三於三忠徳常統ヲ始属吏列席セーボレト
對話又

一應核持事ヲ
其子ト名乗國成ト由系ト乃知世河邊人部内出生也
河邊より南地に移住也哉
馬頭士部内テラウテア一カ出産カテト乙島より英
前引二引エカヤ心カニ亞南人トカニ引取カテ
万尺各凡三十二人居候へ移住也也九人ハ取取巴
人種ト有リ也其後三年經之乙島へ引取カテ交高住候
一七午後中絶住候
右如指即人カ属トカ河邊ト取取カテ

内モ人カ引テヤルドテラニヤントテ若港カ子村
方切屋味甚ク活居時口所住カテウエテ後東部
至仲男ト入水人カ十年ハ号亞未利加縣海部ト云ハ
此心セテ子ニ要知カテカニアル爲へ轉住候也其人
カ連國カ者ニヤルヌテヨシニ二十年号英縣海部
カ島知カ島カ立カ人カ意カ利豆人ヨリニセラ子
ハ万四十五年死カ人カ豆人カールデニビ一カヤ
ヒニ六十一年申候カテ死カテは既カナカ人候十七
人内マクイニヤニ島男女二人男カ言テ即爲時正
一カニカイニヤンカテ世カ言テ病死候也乙島人
十カ人男六人女八人河邊カ移住候カテ一カ人カ
爲時正ハニヤトカテ若爲時住候一人カキユアル

一、此所記地、北に於て、
此村方に、
紅毛人、
存、
六、
云、
名、
所、
是、
一、
一、
死、

布、
一、
子、
女、
ホ、
レ、
ニ、
ク、
一、
各、

神武天皇以三四十艘之舟行於海也
四五年來之三十五艘船泊於此
七年山古英國甲必丹派來由十八年
前英國軍艦
之及十二月
度來泊此
其方最知
至是入
右小下

同二十八日忠德常純以下屬吏列席大村
江對語及其崖畧

一 倉換伊

世一ホレハ病系之振

所夜之り俄之巨痛

出行等不

今於之集

事子

具村

今於

具村

之者

貨幣

珠

第知法中

右貨幣大小數多あり其百巨細書付、如トルラン近
敵に價記置候旨一説し之等得らば在り、中より外國
より品物買渡すに取極るに有らば、其旨に節を以て
小トルランに引替へて其味、其旨に節を以て其旨
家屋と構居るに、一と流、其旨に節を以て其旨
有らば、其旨に節を以て其旨

其書左ノ如シ

- 一二歩金一枚
- 一二朱金四枚
- 一毫分銀二枚

一毫朱銀八枚

一百文錢三十枚

一鉄錢三十枚

件ノ書ニ、皇國貨幣ニ歩金一方二朱金四方一分銀二方
一朱銀八方天保百錢三十枚鉄錢三十枚ヲ器上ニ安排シ
書記ノ所ノ目錄ニ夫々照準シ授ケ与フ抑モ金二分ヲ以
テ洋銀一枚ノ價ト定メ、所以ハ洋銀一錢ノ時價現今各
國港場ニ於テ一元大約三十五六匁ノ融通ナルヲ以テ其
比較ヲ以テ定ムヘキハ勿論ナレ、其新附ノ外國人皇國貨
幣ノ比較ヲ不兼ヨリ端銀アリテハ兼當終ラハシク克列
底セカレハ自然諸物價ニ支障生ラシム斗リ難ニ因テ端
銀ヲ棄捐テ一元三十匁ノ定價トナシ、彼貨幣ニ疑ナカラ

シナシ料ニ真贋對照ノ様式トシテ奥村在住セシホレシ
トクノ西人大村在住シヨロジボトツシウイシトジヨ
ンフヲホロウエレムケレシヨロセフコルリニヌノ五人
ニ共フ各様式貨ヲ分配シ交換テ互ニ合セ相異違ナキ
ヲ會得セシ躰ニテ受納ルル後ニ夕前ノ餘談ニ迂リテ
ジヨロジハ何氣少キ也
七十八番ニ見履被ニ年ノ數々ニキニ金ニホレ
一何是より海東辰一也
一八下五十三年亞國ニモド上此也ルリ海東辰一也
一其ハ亞國ニ河是ニ在立也
一亞米利加合衆國海軍ニ十四年ノ勅命在也

河ハ海ニ為島一殊リ為リ也武高宗レ為レ也
至レ海西ノ為レ也
軍國軍終ニ河段ニ勅命也
最初ニ水更ノ知レ也海運國より日本まで一航
海運不為レ也不感也其ノ船中ノ海人ニ勅命也
本國ニ素子也有レ也
其見履被
海運ニ殊リ也
一八下五十三年亞國ニモド上此也ルリ海東辰一也
一其ハ亞國ニ河是ニ在立也
一亞米利加合衆國海軍ニ十四年ノ勅命在也
為海東辰一也

河以信来原一也哉

其矢八百三十二年四月由人少て其地中ハ

小思有之也哉

是人有し別ジヨリ其地中ハ其地中ハ

口行五人之田四人之何ふ一也哉

与人之能去分一人之カレニ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

其地中ハ其地中ハ其地中ハ其地中ハ

心ハレを何村ニ住居ニ哉
此村ニ住居部ト云々モシテト申者ト曰吾向一住居
五人トモ河邊トリ住居心多ト云々
心ハレハカチカヲヲハイテ島生ト者ハ七四十四
第ニハ第トハ百四十八年モシト去子ハ百五十四年
可トハホレ素ト曰知部ト住居ト外カチカ人ト
ナルス至下トムテウ正ス去今トニ一厨ト一ヨトセ
ウ正レトハ厨ト住居右五人ト以中住
下トモセトホレト一ツ清業女ト百五十年住以前此方浮
人居此ト見ト前此村ト古村トホレ住居ハ村ト古村
ト上ト古村ト住居村ト名付至住倫ト付心素ト様ト云
心ハレ

此時村号ヲ記シ一葉ノ書ヲ通與スセトボレ受取納ム
其後

其ハ心ハレト村トモ古名ト以申者ト一葉ト様ト云
可ト様
其前ハ住居モ知リテ住居ト云々ト此高限ト通住利ト云
之ト住居倫ト付住居ト外國知ト古住居倫ト云々ト
古名ト規ト古名ト云々トトト古ト只ト住居倫ト云
二付先心ハレト一ツ清業ト云々ト
葉ハ住居
是住居ト切實地ト知ト之ト古名ト去ト於場ト標本ト
之ト可ト様
其案内ト住居

巨國一ト云ハ其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
二所ナリト云ハ其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉

一日ト云ハ其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉
其ノ由不レ河紀ト通用仕ル哉

進：小把成防者... 前時... 事也... 伯着... 丁八... 日新... 島可... 日... 之再...
進：小把成防者... 前時... 事也... 伯着... 丁八... 日新... 島可... 日... 之再...
進：小把成防者... 前時... 事也... 伯着... 丁八... 日新... 島可... 日... 之再...

丙十二月

右之通...
右之通...
右之通...

右之通...
右之通...
右之通...

右之通...
右之通...
右之通...

同十九日江戸ニ於テ忠寛建白シテ去ル九日咸臨丸所用
石炭ヲ始メ島々ニテ心用ノ諸品ヲ千秋丸ニ積入レ差配
トシテ支配同心一人ヲ兼セ小笠原鴻ニ航海サセシメ
事ヲ請フ本日信行許可ス同ノ同心藤本潤助ヲ兼組ニ同
廿日再左ノ書ヲ進達ス

